

第3回

謎の銃

皆様、いかがお過ごしでしょうか？

前は史料館内の文献から「横書き」について掘り下げてみました。なんか普通のコラムになりつつありましたが（普通のコラムです）、ご安心ください。今回は**非常に濃い**です。

今回はタイトルのとおり、「銃」のお話です。

白壁兵舎広報史料館では様々な時代の銃器が展示されています。古くは戊辰戦争の時代から現代の自衛隊のものまで、全て実物です。これほど銃器が充実している史料館はここぐらいではないでしょうか？

そんな銃器の中にも「？」となるものがあったりします。今回は本格的に謎を探求していきたいと思います！

本記事では銃器関係の用語が大量に含まれます。初心者の方にもわかりやすい記述を心掛けますが、読者放置で展開する可能性もあります。その場合は**ごめんなさい**。（ご質問はTwitter等でいつでも受け付けます）



ガダルカナルの戦闘



歩兵第16聯隊は第2師団に所属し、昭和17年10月24日に攻撃を開始。10月25日歩兵第16聯隊も戦闘に参加するが敵の鉄条網や火力の前に攻撃頓挫し廣安聯隊長をはじめ多くの戦死者をだした。その後、歩兵第16聯隊は、米軍の攻撃を防ぎつつ昭和18年2月エスパランス岬より撤退した。

↑ 史料館の展示より。新潟部隊は南方の孤島で米海兵隊と死闘を繰り広げました。



今回ご紹介する謎は史料館2階の「大東亜戦争コーナー」にあります。（大東亜戦争の詳細についてはHPの白壁兵舎コーナーをご覧ください。詳細な解説が載っております）

こちらでは歩兵第十六聯隊にとって最大の激戦であったガダルカナル島の戦いが解説されています。展示されているものは遺骨収集団の方々が戦後回収されたものです。弾痕の残る鉄兜（ヘルメット）や血染めの寄せ書きなど、その凄まじさを今も伝えています。

その遺品の数々の中に、日本軍と米軍の小銃が展示されています。金属部分しかないこの銃が今回のテーマです。



南方で長い年月眠り続けた銃は錆もひどく、木製部分は腐食して完全に喪失しています。残った金属部分からどうにか判別するしかない状態です。

上の2つの銃は折り畳み式の照準器（写真①赤丸部分）が残っていることと銃身の長さから日本軍の小銃「三八式歩兵銃」であることがわかります。



↑ 史料館銃器コーナーの三八式歩兵銃。
この照準器（表尺板）は400m以上の射撃の場合引き起こして照準するもので、日本の小銃ではよく採用されています。

さんばちしきほへいしゅう
一脱線① 三八式歩兵銃について一

三八式歩兵銃は明治38年（1905年）に制式採用されたもので、第二次世界大戦終了まで長期間に渡り使用されました。日本人の体格に合わせて小口径化し（モデルとなったドイツ製小銃Gew88の口径7.92mmに対して6.5mm）、低下した威力を補うために銃身を長くすることで銃口初速（弾の飛ぶ速度）と射程距離を確保しています。（この設計思想は前身の三十年式歩兵銃から継承しています）

5発の弾を装填でき、1発ずつ槓桿（ボルトハンドル）を引くことで射撃できるボルトアクション式小銃になります。（この方式は当時のスタンダードでした）



↑ 前回使用した「飛行機射撃」の写真より。表尺板を引き起こしているのがわかるでしょうか？

— そして本題へ —

このまま三八式歩兵銃についてあと5ページくらい語りたいたところですがいつまで経っても本題に入れませんので、断腸の思いで先に進みたいと思います。問題はこっち(→)です。

ルンガ飛行場付近で発見された米軍の小銃と記録されているのですが、そもそも米軍にこんな銃あったっけ？と強烈な違和感を感じました。この銃は一体何なのか？自衛官としての直感を信じて調べてみることに。

— まずは分析 —

右の写真を見ると、槓桿(こうかん)がついていることがわかります。これは銃の遊底を操作するための部品で、撃ち終わった薬莢を排出するために手で引っ張る部分です。この槓桿の形状から三八式と同じボルトアクション式小銃であることがわかります。



— 違和感の原因 —

木製部分が喪失しているので元の外観がわからない以上、残っている部分から推理するしかありません。筆者がこの銃を見てまず感じた違和感はこちら（右図赤丸部分）でした。

この部分は弾倉と呼ばれる部分で、上部から込められた弾薬が収まる部分です。当時の小銃はこの様に引鉄（ひきがね）の辺りまで弾倉が突出しているものと、銃本体に収まっているものに大別されます。（上の三八式には後者に当たるのでこの部分がありません）

とりあえず現時点で確認できる大きな特徴はこれくらいです。ここまでの情報を基に、容疑者（銃？）を並べて片端から比較してみました。その結果、**衝撃の事実**（14日ぶり2回目）が！！

前置きが終わったところで

次回に続きます！



↑ 弾倉部分がはっきりと残っています。大きな手掛かりです。



↑ 赤丸部分を見ると上図のような弾倉が出ていないことがわかります。